

令和6年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応	
<p>1 学びのある学校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習習慣の確立に向けた指導や学力層・個に応じた学習指導により、上級学校進学のための学力を保障をする。 ・授業において、GIGAスクール構想を踏まえ一人一台端末の効果的な活用や主体的、対話的で深い学びの視点からの授業改善に努め、思考力・表現力やコミュニケーション能力の伸長を図る。また、課題を発見し、主体的・協働的に考え、課題を解決することができる探究力を育成する。 ・相互授業参観や研究授業の実施、各種研究会への参加など、研修・研究に積極的に取り組み、教職員の授業力の向上を目指す。 	①	予習を中心とする主体的な学びのサイクルを身につけさせるとともに、基礎力の定着及び応用力・活用力等の育成を図る。	教務課 各教科 各学年	予習を重視することにより、主体的に深く考えて学習する習慣が身につけていると自己評価する生徒の割合が全体の A 90%以上である B 85%以上である C 80%以上である D 80%未満である	後期学校評価結果 予習を重視し、主体的に深く考えて学習する姿勢が身につけている生徒の割合が 86% (B)	今年度(R6)前期(85%)と比べて1ポイント増という結果であり、主体的に深く考えて学習する習慣が着実に定着していると考えられる。今後も主体的な学びのサイクルを習慣化できるよう、学習指導を継続していく。
	②	オンラインでの学習環境を有効に活用し、「探究力」育成に重点をおいた授業を展開する。その際、生徒に対してオンライン学習の意図について十分な説明を行う。	SSH 各教科 各学年 教務課	授業において、「探究力」を身につけるためにオンライン学習を有効に活用することができたと考える生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	オンライン学習を有効に活用することができたと考える生徒の割合が 90% (A)	昨年の結果から、オンライン学習は「探究力」を育成するための授業の展開においては効果的であるということがわかったが、取組率の上昇が課題であった。今年度は生徒に対してオンライン学習の意図について教員から十分な説明を行うことで、取組率の上昇につなげることができた。「有効に活用できた」の回答は55%であり、今後も生徒の主体的な取組を促すような教材の研究開発を継続する。
	③	生徒の具体的な活動を評価するパフォーマンス評価をさらに充実させ、学校設定科目や課題研究における探究活動でルーブリックを作成し、それを用いた評価を行う。生徒が自身のフィードバックに有効に活用できるように改善するとともに、ルーブリックの評価内容を生かせるよう、具体的な活用方法を生徒へ提示する。	SSH 進路指導課 各教科 各学年	「課題研究発表会」において、ルーブリックが自身のフィードバックに「有効に活用された」（「有効だった」の回答のみ）と考える生徒の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	「有効に活用された」（「有効だった」の回答のみ）と考える生徒の割合が 41% (D)	肯定的な回答をした生徒は全体で97%（昨年度84%）であったが、「有効だった」と回答した生徒は41%であった。答えのないことに対する積極性が身についたと答えている生徒が多かった。今後は、ルーブリックの評価内容を生かせるよう、具体的な活用方法を生徒へ提示する。
	④	課題研究を通じて、生徒に主体的・協働的に課題を解決することができる探究力をつけさせる。	SSH 進路指導課 各教科 各学年	2年生、3年生の文系において、課題研究を通して探究力がついたと考える生徒が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	「とてもそう思う」と考える生徒の割合が 72% (C)	肯定的な回答をした生徒は全体で100%であったが、「とてもそう思う」と回答した生徒は72%であった。今年度は、探究スキル講座の実施、普通文系の課題研究にも外部人材を活用を通して、探究力の向上を図った。普段の課題探究の指導力の向上について、講座の充実や教員の指導力向上の取組み、校外発表の機会を通して、さらに探究力が身についたと自己評価する生徒を増やしたい。
	⑤	研究授業等を通して、教員自らが教科指導力を高め、授業の質的向上を図る。	教務課 各教科	アクティブ・ラーニングの手法を取り入れたり、ICT機器の活用を工夫することで、自らの授業を改善することができたと自己評価する教員の割合が A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	後期学校評価結果 私はICTの活用を工夫することで授業改善につながった 91% (A) 私はアクティブラーニングの手法を積極的に取り入れている 89% (B)	昨年度(R5)後期と比較して1ポイント増加しており、ICT活用による授業改善が着実に定着していると考えられる。また、アクティブラーニングに関しては、昨年度(R5)後期より1ポイント増となっている。今後は、一人一台端末等のICT機器(ChromeBook)を効果的に活用した授業改善を通して、教員の教科指導力を高め、授業の質的向上を図る取組みを行っていきたい。
学校関係者評価委員会の評価		オンライン学習やICT機器を有効に活用できたと考える生徒・教職員が多いがどのように活用しているのか。				
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策		オンライン学習を予習に利用することにより実験や探究の時間を捻出している例がある。相互授業参観を行い、他教科の授業を見る中でICT機器をどのように使うかという部分で参考になったという意見があったので、今後も継続していききたい。				

令和6年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
<p>個性が輝く学校</p> <p>・学習指導と進路指導の連携が取れ、3年間を見通した指導体制のもと、生徒に高い志を持たせ、一人一人の進路実現を図る。その際、低学年からのキャリア教育を充実させ、学ぶ意欲や進路意識の高揚を図る。</p> <p>・「文武両道」「自主自律」の精神のもと、学習活動のみならず部活動や学校行事、生徒会活動の充実を図り、豊かな人間性と社会性を育む。</p>	①	進路指導課 教務課 各学年 SSH	<p>難関10大学と国公立大学医学科を志望する生徒数（第2学年）の合計が</p> <p>A 160人（50%）以上である B 144人（45%）以上である C 128人（40%）以上である D 128人（40%）未満である</p> <p>難関10大学と国公立大学医学科の合格者数の合計（現役生と過年度生の合計）が</p> <p>A 70人以上である B 60人以上である C 50人以上である D 50人未満である</p>	<p>9月2年進路志望調査結果</p> <p>172名（A）</p> <p>難関10大学合格者が52名（現役39名）国公立大学医学部医学科合格者が8名（現役8名）</p> <p>60名（B）</p>	<p>難関10大学志望者が159名、医学部医学科志望者が13名であった。難関10大学志望者および医学部医学科志望者が4月に比べ若干減少しているが、高い水準を維持している。昨年度と比較すると、難関志望数および医学部志望者数が共に増加している。志望している生徒が結果を出せるような指導を、学年団とともに行っていきたい。</p> <p>難関10大学合格者数が2年ぶりに50名以上となり、難関10大学すべてに現役合格者がいた。大阪大学合格者数は過去最多の17名、国立大学医学部医学科の現役合格者も過去最多の8名であった。一方、東京大学・京都大学の理系合格者は一人もいなかった。引き続き「医薬系学部研究会」の拡充を図る。また、補習や模試のあり方を見直し、難関10大学を志望する生徒の支援の拡充する。</p>
	②	生徒指導課	<p>生徒の服装・挨拶などの生活指導が適切であると考える保護者の割合が</p> <p>A 95%以上である B 90%以上である C 80%以上である D 80%未満である</p>	<p>後期学校評価結果</p> <p>生徒の服装・挨拶などの生活指導が適切であると考える保護者の割合が</p> <p>94%（B）</p>	<p>前期から2ポイント、昨年度(R5)後期から1ポイント減少し、B評価となった。身だしなみや挨拶、その他規範意識等について、自分事として捉え、自ら考え、積極的に行動できるよう、引き続き指導に努めていきたい。</p>
	③	生徒指導課 教育相談室 各学年	<p>みんなで何かをするのは楽しいと考える生徒の割合が</p> <p>A 95%以上である B 90%以上である C 80%以上である D 80%未満である</p>	<p>後期学校評価結果</p> <p>みんなで何かをするのは楽しいと考える生徒の割合が</p> <p>97%（A）</p>	<p>前期及び昨年度(R5)後期と変わらず、昨年度に引き続きA評価であった。生徒が安心安全に、また充実した学校生活を送ることができるよう、日々注意深く観察し、いじめの兆候を見逃さず、教職員や保護者、関係機関と連携して組織的な対応を心掛けていきたい。</p>
	④	生徒会課 部同好会顧問	<p>部活動が人間力の向上(学業との両立、挨拶など)につながったと考える生徒の割合が</p> <p>A 65%以上である B 50%以上である C 40%以上である D 40%未満である</p>	<p>後期学校評価結果</p> <p>部活動が人間力の向上(学業との両立、挨拶など)につながったと考える生徒の割合が</p> <p>62.8%（B）</p>	<p>昨年度より2.2ポイントの減少である。職員のアンケートからも好感度が数ポイント減少している。部活動を頑張っている生徒が多いが、ここ数年、2年後期に部活動をやめる生徒が散見される。成功だけではなく成長を意識した指導と、成長を通じての自己肯定感、自己有用感が向上していくよう指導したい。</p>
	⑤	保健環境課	<p>環境美化意識を持って行動している生徒の割合が、</p> <p>A 95%以上である B 90%以上である C 85%以上である D 85%未満である</p>	<p>後期学校評価結果</p> <p>環境美化意識を持って行動している生徒の割合が</p> <p>91%（B）</p>	<p>評価結果は91%(昨年度比-2ポイント)であった。2学期の環境美化週間のクラス点検の結果は合格クラスが54.1%(13クラス)であった。経年するほど合格クラスが多くなった。1年生は1クラスのみ合格という結果であり、3学期の美化週間で意識の高揚を図りたい。日ごろの清掃活動などの全体で見ると、比較的環境美化意識が高いと言える。今後も引き続き継続できるよう、環境美化委員会を中心に取り組んでいきたい。</p>

令和6年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標	具体的取組	担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
2	⑥ 教科・学年および図書委員会と連携し、生徒の図書室利用を促進する。また、読書への関心を高め、知的好奇心の喚起に努めることで、総貸出冊数を増加させる。	図書室 各教科 各学年	年2回（春・秋）不読率の平均が A 50%未満である B 60%未満である C 70%未満である D 70%以上である	アンケート結果 （3回実施） 57.3%（B）	昨年度末の56%に対し、数値が上がっている。また、本の貸出冊数も昨年に比べ減少しており、中でも1年生の貸出冊数が少なくなった。約半数の生徒が本を読まないこと、学年進行やアンケートを重ねるにつれ、不読率が上がっていることなど、本を読むこと自体が生徒にとって身近なものではなくなっているようだ。各種イベントや企画展示など、さまざまな機会を捉えて情報を発信し、生徒の図書室利用と読書意欲を喚起できるよう図っていきたい。
	⑦ 体育の授業を通じて、体力向上の大切さを理解させ、筋力・走力と、体力の源である持久力アップのための取組を行う。春(4,5月)と秋(10月)に持久走を測定し、タイムを比較する。	保健体育科 各学年	走力（持久力）の記録が、春より秋に向上した生徒の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	持久走の記録を春と秋で比較し、向上した生徒の割合が 70%（B）	全体では、70%の生徒の記録が向上した。学年で見ると1年生は76%（昨年比-8ポイント）、2年生は75%（昨年比-4ポイント）の向上となった。3年生は部活動を終了するため数値がさがりやすく、59%の生徒が向上した。また、男子と女子を比べると、男子74%、女子66%が向上した。この差は顕著であり、今後女子の運動への興味・関心をどのように引き出すかも重要である。精神的な力が必要である持久力の取り組みが長年本校の強みであったが、近年、数値が減少傾向にある。心身両面の体力を育成してためにも、今後は体育の授業はもちろんだが、学校行事、部活動等を含め学校全体で雰囲気づくりに取り組む必要性を感じる。
学校関係者評価委員会の評価		学校の取り組みに対して保護者は評価しているので、今後も引き続き、取り組み内容の充実を図っていただきたい。			
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策		学習活動のみならず部活動や学校行事、生徒会活動のみならず、LHや総合的な探究の時間を通して、重点目標の達成を図りたい。			

3 地域から信頼される学校 ・学校公開やホームページ等を通じて本校の教育活動を積極的に情報発信し、保護者や地域から信頼される「開かれた学校づくり」を推進する。 ・地域でのボランティア活動を推進するとともに、異校種間の連携を密にし、南加賀地区の基幹校としての自覚ある学校運営に努める。	① 主な学校行事や特色ある教育活動等について、生徒・保護者・地域から求められる情報を、ホームページやPTA活動等を通じて発信する。	総務課 教務課	学校は開かれた学校づくりに積極的に取り組んでいると考える保護者の割合が A 95%以上である B 90%以上である C 85%以上である D 85%未満である	後期学校評価結果 学校は開かれた学校づくりに積極的に取り組んでいると考える保護者の割合が 98%（A）	98%で、昨年度比プラス3ポイント プラスになった理由は令和5年5月からのコロナ5類移行に伴いコロナ禍のようなPTA活動に制限がかかることなく、手指消毒やマスク着用も各自の判断に任せることとなったこと。また、各種PTA行事に対して会長はじめ役員の方が中心となり積極的かつ効率的な取り組み案を打ち出し行うことができたことにある。さらに学校からの様々な情報をタイムリーにメール配信・ホームページにアップすることで直接保護者に情報が届けることができたのが高評価につながったと考える。次年度も今年度にならい、メール配信登録が、早い段階で100%になるように取り組んでいきたい。
	② 部・同好会活動が、各々の特性や得意な分野を活かすなど、地域等のボランティア活動に年間最低1回は参加する。	生徒会課 部同好会顧問	ボランティア活動に参加した部・同好会活動の数が全体の A 90%以上である B 80%以上である C 70%以上である D 70%未満である	ボランティア活動に参加した部・同好会活動の割合 94%（A）	ほとんどの部・同好会が11月から12月を中心に、校地内外でさまざまなボランティア活動を実施した。校地内での清掃活動が多いので、学務員と協力して、効率よく活動を心掛けたい。校舎内の清掃が行き届かない場所も案内して、協力してもらおうと思う。個人の活動として、外部のボランティアへの参加も促したい。
学校関係者評価委員会の評価		地域において生徒の挨拶は以前より返答してくれる生徒は増えたと思う。ボランティア活動も今後継続していただきたい。			
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策		日頃の声かけや部活動毎の朝の挨拶運動が功を奏しているのではないかと。今後とも無理のない範囲で継続していきたい。			

令和6年度 学校評価（自己評価）最終評価報告

石川県立小松高等学校

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	最終評価	分析（成果と課題）及び次年度の対応
4 教職員の働き方改善 ・各自がワーク・ライフ・バランスやタイムマネジメントを意識して業務や部活動の効率化を進め、時間外勤務時間の縮減に努める。	① 教育的効果を考慮しつつ、行事・業務の整理を行うとともに、業務の平準化を進める。	副校長	行事・業務の整理・統合・精選により、校務の効率化が図られたと考える教職員の割合が A 70%以上である B 60%以上である C 50%以上である D 50%未満である	後期学校評価結果 行事・業務の整理・統合・精選により、校務の効率化が図られたと考える教職員の割合が 77%（A）	前期より7ポイント、昨年より20ポイント上がり評価はAとなった。一因としてICTの活用や採点業務省力化ソフトの導入に慣れてはきたことや土曜ゼミの見直し等が考えられ、更なる効率化が行えるよう啓発していきたい。
	② 月2回の定時退校日、部活動の休養日等を設定し、さらに業務遂行の効率化を進める。	教頭	時間外勤務が80時間を超える教職員の割合が A 5%未満である B 9%未満である C 13%未満である D 13%以上である	教職員勤務時間調査結果 時間外勤務が80時間を超える教職員の割合が 7.5%（B）	職員の1人当たりの時間外勤務時間は昨年度と比べると3.7ポイント程度、時間にして1.5h程度減少している。しかしながら、80時間を超える教職員の割合は昨年度の7.9%から今年度は7.5%と、わずかな減少に留まった。したがって、全体としては時間外勤務時間の縮減は多少進んでいるが、特定の教員の過重な業務負担については課題が残っている。今後とも、校務のさらなる効率化、平準化を図りたい。
学校関係者評価委員会の評価		教職員の校務の効率化が図られたと感じる割合がものすごく上がっているのはどうしてなのか。			
上記の評価結果を踏まえた今後の改善策		校務の効率化については、働き方改革を意識している教員が若い方を中心に多い。コロナ明けで行事を精選したことも要因にあげられる。今後各部署の業務をできるだけ平準化するよう見直していきたい。			